## 8 本の初夏 F

葉の中央に暗い穴が莖

通つて居るのがある。

通例前

景植

物と

て居るもので、

その莖を

我慢にも

鵜 澤 四 丁 譯

られるし、 理方で、夕飯には種々新しい異つた形 と野菜と煮たものや、 を砂糖で煮たものは の葉の牛酪で揚げたもの。 を醤油で料理したもの、 オシゲサンの料理で好かったのに、鰻 根の意味を解するのもまた一興である ラネルの衣服を木綿のキモノに換え が仕事を終って熱い湯に這入つて、 間ならば舶來の鑵詰でも事は足りる、 するので、さしたる不自由はない。僅の ました。変粉やウイスキーは町で求め 辯當は松葉が準備してくれ る洋食です の食物を作つて喜ばしてくれた。 商店を見て歩いた。 て來るのか味ひながら字書を相手に大 て、床に坐して、日本料理の皿に盛つ 一人で夕飯後には町を散歩して芝居 牛は彦根で毎土曜日に屠殺 オシゲサンは大料 一寸と食へる。米 奇妙な野菜等は 豆腐、 百合の球根 荷、

這入つて來て、われと盃のとりやり 煙草入と煙管と少さな火箱を持つて をするかに注意して居る、するとわ 儀であるのだ。それからソーキンが ですと常にいふた。それが東洋 は汚くて醜ですが、 は汚くて醜であるといふ處で、 れの飯の終にはもう澤山です、 まづいて、酒や飯をやつてどんな風 タカキかオシゲサンがわれの前 食へなかつた。夕飯の膳が出ると、 煮て夕飯の膳に上つたが、 後に刈取られたと思ふと、 して知られ

擧手一投足皆規則があつて、 をしてから、 話をする。或は井伊侯拜領の茶の湯 奇妙な儀式であって、 道具を出して、 ぜぬ外國人には評價し能はざるもの にすべきものではない。質に饗應 茶の湯は普通の茶を呑むのと同 會話も主人の美術 坐つて煙草を喫み、 抹茶か立てしくれ 到底其道に通

厭であった。己が水彩畵中にある大きい丸い葉が澤山あって、

である。

日本に奇麗

は國

はり西 情も仕合つて居つた。しかし双方の煙草を喫合つて試ると、 るのであッた。 見て居るのを嫌悪がるのを知つて居るので、多くは己が室に居 的 管へつめて、マッチと共に持って來てくれる。 か得て、 澤山 湯の儀式は二百年以前から變はらない 興 時 **ビれの庭園や小丘の石佛を寫生するのを遠くから見て居** 津煙草が可といふ事であった。 にあるのである。互に煙草を愛喫するので、共に大いに同 味 々われの煙管に煙草が空っなッたのを見ては、 があるもので、 われの背越に寫生を見ながら、 事に限る。 釜、 茶碗の如き普通古代の陶器であ 茶碗、 其他の 寺の老人はわれの寫生を が、 什器が 一寸と會話などもす 細 この時は暫時免 皆歷 目の異なる流 史的 他の煙 美 茶 派

物の網で、 蜒が非常に澤山で、 夏が來て、陽氣は暑くなる、 根切ッての唱手であるといふ紳士があッた。一寸會話をしてウ 木の枕を用えるが、 蚊帳の入る時節にはそれを釣る。 寢室と別 れで蚊が居るので、 わが事に田 を訪 にない。 四隅で釣るのである。 團 問ずるも 舍新聞が數節を費やしたので、 ををいて、長枕のやうにして寢ることにした。 臥床の時が來ると蒲園を持込んで來て、も それには何うしても出來なかつた、 夜は稻田から火取蟲が酷く飛んて來る。そ 蚊帳が入るのである。 0) が、 數えきれない程であつ 蟲は増々多くなる。 日本人は首を休めるに少さな 蚊帳といふのは緑色の薄い織 日本の家には わが動静を伺ふため 日中は 其中に彦 が後に 蝶 や鯖

ニュニ

數ケ月を夢の如

くに

費したが、

賢くも日

本政府は旅行者

餘儀なくも

神

0

怠惰ル見越した規則を作がてあるので、

少しもないやうに聞える。 佛教の僧侶と を離れた枝を剪ッたりして。 費してしまッた。 へ燕子花を生けたりして。そして、 イスキー 滑稽であッた。 を出 神 して、 徒 唐銅の大花瓶へ躑躅の枝を垂したり、 0 唱の 神寓歌である。 美術好の友人は午後の時間 形を聞きたい 巧妙な言葉振りがたと嫌悪な響に 外國 挿木の葉を卷いたり、 人には 歌の調子などは を可 歌 掛 加减 鱗形 9 花 聞 11

あるから。繭は一石三十圓位であるとの事。
忙、オシゲサンは甚た心配な時で、重な收入もこれに依るので生長して、桑の葉をやるせわしさ、繭となるまでには非常の繁生長して、桑の葉をやるせわしさ、繭となるまでには非常の繁

て、 地へ上ツて、 て、 害はしないのであるが、什麼にも不愉快なものである。 食物を貰うとして、 あ 11 生 わが室の下の池には鯉や龜の子で一ばいて、われ シは殺して皮を剝いて、 30 唯 捕にした。 側へ寄ろうとすると、 極温い日にのみ見るばかり、 種の 此他の蛇は日本では幸運か下すものとしてあるが。マ 毒 卵を生んで、穴を埋めて居たのを見付て、 此 蛇がある。 日は蛇も一匹捕ッた、大きさは可なり大きくて 争ふて寄りて來る。 體を于して、 少きな鳶色の動物でマムシといふので 周章で、水中へ滑込む。動が或り、石の上で甲羅か干して居る 藥劑として貯蓄する。 古龜等は億病 の影を見ると、 であるの 日本に それを

私污濁 土を泥にして、 は大麥や菜種の收獲か了ると直に、鍬で起して水か灌漑して、 の背には な熊手であるので、尤も牛や小馬に曳かして耕すのも見た。 田は男女で埋まる程で、 が爲に地所の廢りは少しもない。これが六月の十八日、 線の霧のやうに見える。境界の畔には豆や野菜を植える。これ 動かずに八九株位を植える。さて植上げた田を見ると全然淡い を指先で泥中へ植えるのであるが、その植えるの、早いこと、 て、東に一て、泥土の中の處々へ投げる。それから男女がそれ てあるのた、 の衣服や油紙、 寺を去ると俄に雨が降ツて來て終日止まなかツた。 るものが多くて、大いに慰籍を得た。頃は田植だ甚だ多忙の時 夕陽の琵琶湖を見んが爲に毎夕上ッた高臺等に告別の辭をのこ こしの朋友や、 ッて新旅行券を得なければならないのである。さればわれ して、再び汽車に乗ッて、 一寸と屋根を作って雨に濡れぬやうにしてあった。 骨の折れる仕事はあるまい。仕事は鍬や、重い四角 旅行者殊に風景畵家の為めには甚だ不愉快な時節で 田が植えるばかりになると、 熊手でならすのである。 羅漢や花未だ紅に、苔蒸した躑躅の木 簑等を着て 泥のなかへ膝を没して、笠着けて、 普通の場所へ歸ることしなッた。 雨を除けて居る。農事中では、それ 稻の苗は苗代に密生し 引抜いて、根を洗ツ が車から見 や、また 田

> を集めたものである。 これに太平洋畵會展覽會水彩畵室の聞き書と二三誌友の投書と

■丸山君の『薄日の妙義』はエゴイ圖吉田君の『淺間山』山上を 大江魚でも浮いてぬるのかと思った園中川君の空は不相變ラシ 丸は魚でも浮いてぬるのかと思った園中川君の空は不相變ラシ 丸は魚でも浮いてぬるのかと思った園中川君の空は不相變ラシ 丸は魚でも浮いてぬるのかと思った園中川君の空は不相變ラシ 丸は魚でも浮いてぬるのかと思った園中川君の空は不相變ラシ 丸は魚でも浮いてぬるのかと思った園中川君の空は不相變ラシ 大下君の『海姫』は美しい、こんなものか描く石井君も隅 には置けぬ、但し毛布は綿入のやうでボテん ■吉田君の『月 には置けぬ、但し毛布は綿入のやうでボテん ■吉田君の『月 には置けぬでのやうな思ひがする ■ 藤島君の『淺間山』山上を 見草』は水中のやうな思ひがする ■ 藤島君の『淺間山』山上を 見草』は水中のやうな思ひがする ■ 藤島君の『濱間山』山上を 見草』は水中のやうな思ひがする ■ 藤島君の『濱間山』山上を りである。本暦きである ■ 大下君の『本崎湖』の白

政治家、或は農夫、商人たるべし。而して後に、或は學者、或は

る美術家の作品は、如何に巧妙を極むるといふとも眞の生美術家もまづゼントルマンたるべし。ゼントルマンならざ類倒せる教育は禍ひなる哉。(羽仁吉一氏『隨感』青年の友)

命あることなし。